いわむろ

発行所　岩室村役場　No.19
印刷所　巻・北洋印刷KK

第一回新潟県公報コンクール参加紙

血圧の迷信と正信

寒なくると気になるのが血圧，この血圧について迷信と正信をあげてみましよう。まず迷信では，①年をとるに従つて血圧が高くなる②血圧は安定していて動揺しない③腕の血圧を測れば脳の血圧の検討がつく④高血圧の場合脳いつ血になる危険が多い⑤酒をのむと血圧はあがる。以上はみんなウソです。正信では①脳いつ血は遺伝する②脳いつ血は再発しやすい③脳いつ血は冬に多く夏に少い④若くてきた卒中は死亡率も高く痲痺の程度も強い⑤米作，米食県ほど脳いつ血死亡率が高い⑥男性の方が女性よりも卒中にかかりやすい。以上は本当のこと。

新しい農村への胎動

農業構造改善について

巻普及所長　西村欣策

◇……農業構造改善……私たちの耳にもいつしか聞きなれてきた様な感じがする。八月一日付新任された西村所長さんから農業構造改善についての玉稿をいただきましたので御紹介いたします……◇

一、はじめに

私達の農業も、おおよその仕事が機械化され、肥料や農薬も素晴しいものが出廻って、大きな進歩を遂げたようだけれども、此の頃の農村には、果してこのまま農業をやって行けるのかどうか、というモヤモヤが消えないようです。

気の早い人達は、農業に見切りをつけて、他の職に移るというものさえ現われ、村の中堅であった農家が、いつの間にか兼業を主とした農家になっていたりしています。

又農家個々の中には、家のあと取りの問題、嫁や婿取りの問題、手不足や機械化貧乏の問題など、何かの悩みを抱えたものが、村中に立並んでいるというのが、農村の姿のようです。

こんなに農村が、あわただしくなった大もとは一体どこにあり、これからどうしなければならないものであろうか。

二、農村の中にあるもの

ところが、今までの日本の農業の進んで来た道が、案外間違っていて、外の進んだ国に比べると百年位もおくれているということで、急いで近代的な新しい農村に生まれ変らなければならないということが、日本農村の悩みとなっているのだということになります。

そこで、間違った方向とは、何であろうか。

㈠農政の進め方の問題

中堅農家を、一～一・五ヘクタールの土地で生活して行くような仕組みでは、近代的な設備や、明るい生活の基盤とはならなくなった。

明治九年の地割当時の農家の規模と、昭和二十一年の農地解放の際の土地所有の状況とは、八十年間に何の変りもない。

㈡社会構造の問題

人手不足の問題が、やかましいけれども、農村人口の動き出したのが、近く七～八年前からで、最近までは、二、三男対策で悩まされたものである。先進国の農村では、この現象は、百五十年も前からの出来ごとであった。

㈢農業機械化の問題

農村に人手のあり余る時代に、初められた農業の機械化は、手労働的な機械で、近代的農業の中では、構造上の問題と、経済価値の問題で再出発の形となった。

㈣農業基盤の問題

耕地整理が、ほぼ整ったようであるが、鍬や鎌時代の農業に合わせたもので、再整理が、近代化の基本だと言われている。

㈤農業技術の問題

技術の進歩は素晴しいといわれるが、新しい農村作りの前には、小農技術として、一ぺんに価値がなくなるようなものが多い。

㈥農業経済の問題

労働に報えられない仕事を「百姓の手間は只だ」、という考え方で働いて来たために、報えられない所に人手は止まらず、労力不足となった。

又農産物の価格についても、資金に見合う収入のない農業が続けられて来たために、設備や資金の枯渇の原因となった。

以上のような農村の仕組みの中では、進歩だと考えられたことが、殆ど方向転換をしなければならなくなったのである。

三、農村の構造改善

このように、前時代的な生産方式の農業では、新しい産業発展の中で、所得の較差が大きくなり、だんだん見劣りがして来るのは当然である。

一方では、民主的自由社会の中では、生活の標準化や、平等化、平均化などが進んで、分度の生活などという古い考え方がなくなると、所得均衡という言葉が叫ばれ出し、それに伴って農業の生産も高め、農家の所得を増さなければならなくなったのである。

そこに、兼業農家が殖えたり、農業の構造の改善が必要になったりするのである。

それでは、単的に言って、農業の構造改善とは一体何であろうか。

即ち、経済の動きを予測しながら十～二十年の見通しのもとに、農業の生産を高めながら、農業者が、都会に働く人たちと、余り差のない生活が出来ろように、仕組みを作り直すということである。

政府は、こうした仕組みを作る「モデル」的な地帯を作って、新しい時代に応じた村作りをしようと、農業構造改善事業を初めたのである。

さて、その事業は、いろいろに説明されているが、解り易くその内容を知るには、直接農林省のきも入りで行っている。千葉県成田市の農業構造改善事業の状況を見ればよいと思う。

先ず、都市近郊地帯である成田市では、農業と他の産業との所得の較差をなくするために、次のような対策を建て、着々実行に移しているものである。

・水田作地帯は、おおよそ一戸当り四ヘクタールになるように、小さな農家の移動も考えてやる。特に工場を誘致した。

・畑作地帯は、甘藷や、その他の飼料作物を作って乳牛を主軸にした協業経営で行く。
百三十頭の乳牛導入

・離農者は、一戸当りの所得が、八十万円以上になるように、誘致工場で、就業補償をする。

・その他は、集約的な作目で、他の農家と均衡するように設備をする。

こうしたことで、必要経費二十九億円を農林省が補助や融資をするという、大がかりなものであるが、この成田市の、一部落で行われる、構造改善事業の内容を知っておれば、私たちの進む方向も、ある程度わかって来ると思う。

そこで、将来あるべき農業の姿は、

一、大圃場農業であるか
一、高度集約農業であるか
一、完全兼業農家であるか

この三つになるのではないだろうか。特にこの三つの型を説明するまでもないが、大型の農場で、能率の高い機械で、新しい技術体系の整った農業は考えられる。

次に、粗放な大面積農業よりも、坪当りの収入で行こうとする集約農業。

それに、完全な就職先をもった兼業農家の安定性と、その選び方は自由であるが、予測される形である。

四、結び

何れにしても、高い水準の文化的生活を維持する、農業の生産方式は、お互いに協調して、主産化された形を整えなければならないので、個々のバラバラな経営を選択的拡大だとは言いなくなる。

そこに、村や部落の中で構造改善事業として行う必要があるわけであろう。